

助産学に医学英語を取り入れる試み

The Adoption of Medical English to Midwifery

鈴木 由美

はじめに

専攻科は5期生を迎えることになり、助産学英語表現法の講義について、7回の講義において得られる最終目標について検討してきた。その理由として、実際に臨地実習の場で、カルテなどを目の当たりにすると理解できない学生も見受けられたこと、および本来は大学院受験などへの橋渡しとして、英語表現を身につける目的で講義が組まれていたにもかかわらず、卒業後英語を手段としてステップアップするケースが、過去4年間には見られなかった。

また昨年も学生が長文読解による講義を嫌う傾向があり、17名中13名が「看護学校での英語は役立たない」と回答していた¹⁾これは新田、池上ら²⁾の報告の中で、外国語以外の科目は臨床で役立ったが、特に学卒以外のものについては、半数以上が外国語を「役立っていない」と考えていた結果と一致している。新田らの報告では更に、それまでの学習暦の相違があると述べていた。当学専攻科学生も殆どが学卒者ではなく、この報告と同様の傾向があると考えた。

今年度の専攻科学生の半数以上が、助産師養成課程に来て英語を勉強することに意外性を感じていた。また文章読解どころか、英単語の読み方がわからないといった学生が多く見られた。実際に過去の学生も含めて、英語が受験科目にないことが理由で当学を受験したという声もきかれる。英語を勉強することに抵抗がない学生は少数であり、そのほとんどが英語を苦手としていた。また学生が17名と少ないため、選択（必修）科目である英語を習熟度別グループに分けることは有用な方法ではないと考えた。

英語を医療系のコースで取り入れることは、確かに医学分野の英語に興味をもつことの橋渡しとなることもあるが、ともすると英語嫌いを助長させてしまう可能性もあると考えた。専攻科学生の意識も、昨年と同様に海外活動のニーズがあるものから、仕方なしに英語を履修することになった者まで様々で

あった。

今年度から、助産学英語表現法の講義を筆者が担当することになり、事前に学生のニーズを中心にプレアンケートを行い、その調査結果を学生に還元し、7回の講義プランを立案して授業を進めた。定期テストにて不合格者が出ることなく、学生は単位を修得できた。

今回は、こうした助産学英語表現法の講義の経緯について報告する。

事前調査～授業・定期テストの経緯

本来の助産学英語表現法の授業の概要は以下の通り。

「平易な英語で、助産領域では特殊な使い方がされる。この講義では、助産学領域に頻出するカタカナ表記語、動詞、名詞、形容詞の効果的表現法を分析、学習する。最低限、英語が読めてカルテ用語が理解でき、もう少しレベルアップさせることで、平易な英語で説明ができる、保健指導ができるようになるなど、習熟度別のグループ編成をしていく。講義においては毎回英和辞典を必携のこと。」とした。しかし事前調査によって、若干の修正が必要になった。

- 1) 講義開始前（5月）に事前調査実施
- 2) 1) の調査結果を学生に還元
- 3) 2) を踏まえて講義の進め方についてガイダンスを行い、6～7月の7回の講義の最終目標を以下のよう

①とにかく文章ではなく、単語が読める、それも発音などは関係なく、単語を見て意味がわかること。

②臨床で、カルテの英語に遭遇したときに困らない。この2点であった。

- 4) 9月1日定期テスト実施（他教科の定期テストと同時期）

事前調査（レディネスチェック）の結果

学生に事前調査した結果の概要は以下の通り。

英語、外国語に関する抵抗について、英語学習の最終目標、外国人に対する抵抗、英語のイメージ、

関心、助産師にとって英語の必要度、学生のこれまでの英語学習の意識、意義、そして専門教育における英語学習について、などについてである。

倫理上の配慮として、調査結果は成績には一切関係ないこと、匿名でよいこと、無回答であっても不利益を被らないと、回答の自由などを明記した。以下その内容と結果を示す。結果は上位から項目までを示す。()内は人数。N=17

A 英語(外国語)への関心:(複数回答)

英語の音楽のCDを聞くことに関心がある(8)、外国(英語圏)へ行くことに関心がある(6)、英会話を学ぶ(7)などが挙げられ、文献を読むことに関心があるものは一人もいなかった。

B 英語の到達目標:(単数回答)

英語の専門用語(医学用語)がわかるようになる(9)、英語の文章(一般)が読めるようになる(3)、海外旅行で困らない程度になりたい(1)などであった。

C 英語のイメージ:(複数回答)

カルテの英語が読めると、仕事ができるようになる(10)、外国に行って、人助けができそうである(11)、外国人とコミュニケーションをとるための道具である(13)。

D 外国人について:(単数回答)

すべて外国人には接近したい(5)、人種による(6)、外国人はすべて近寄りやすい(3)。

E 英語(外国語)の必要性:(複数回答)

助産師、看護師の仕事では、英語は必要ない(8)、英語は、医師には必要だが助産師には必要ない(11)。

F 英語(外国語)の得手不得手:(複数回答)

受験科目に英語がない看護学校を探して受けた(7)、高校までの時点で、英語は興味があった(6)、中学校卒業の時点で英語の成績がよくなかった(4)、受験科目に英語がない助産師学校を探して受けた(4)、助産師学校に入れば英語を勉強しないでよいと思った(4)。

G 専門学校、大学などの英語について:

「そう思う」から「思わない」の5段階評価で多い順に、合計して半数以上に回答された項目のみ列挙。

- 1) 一般教養で習った英語が役に立ったことがない:そう思う(6)、やや思う(5)
- 2) 一般教養で習った英語は主に医療系の文章だった:そう思わない(7)、そう思う(4)
- 3) 一般教養で習った英語は主に医学に関係ない内容だった:そう思わない(6)、そう思う(4)
- 4) 助産師学校などで、英語も含めた外国語をやる

必要はない:そう思わない(6)、そう思う(5)

- 5) 助産師向けの参考書の英語(外国語)での表記はもっと減らしてほしい、どちらともいえない(9)
- 6) 助産師向けの参考書の英語(外国語)はもっと多くしたほうがよい、どちらともいえない(9)
- 7) 助産師向けの参考書の外国語は英語以外ももっと多く表記してほしい、どちらともいえない(10)
- 8) 助産師向けの参考書の外国語は1ヶ国語に統一してほしい:そう思う(5)、やや思う(7)
- 9) 地域的なニーズを考えると、英語以外の外国語学習が必要だ:そう思う(5)、やや思う(4)、どちらともいえない(5)
- 10) 習熟度別のクラスに分けてほしい:そう思う(5)、やや思う(2)、どちらともいえない(5)
- 11) もし希望者だけの英語(外国語)学習会のゼミがあれば参加したい:そう思う(3)、どちらともいえない(5)、思わない(4)

H 英語学習の意識

- 1) 地域的なニーズがないと、英語などの外国語を学習する動機がもてない:そう思う(6)、やや思う(5)
- 2) 上達のためには、外国人に接触することが必要だ:そう思う(9)、やや思う(7)
- 3) 修士課程に進学することを考えると必要だ:そう思う(7)、やや思う(4)
- 4) 助産師コースで習っても、きっと役に立たないと思う、どちらともいえない(6)、やや思わない(5)
- 5) 助産師コースで習うと、きっかけができると思う(8)、どちらともいえない(8)

事前調査についての考察

英語学習へのニーズは音楽や海外活動など、実践的な部分についての関心が高かった。それに対して、専門用語がわかるようになると回答していたものが半数以上いたことは、講義要項で提示したことが影響していたと思われる。また地域性として、英語圏の外国人と遭遇することが少ないためか、「人種による」など何らかの形での外国人への抵抗はみられた。また地域性を考えると英語以外の外国語の必要性を半数以上が感じている。群馬県では南米出身者が多く、英語を使用する外国人としてはフィリッピン人などがメインである背景がある。

看護職では英語が必要ないと回答した者が半数以上おり、助産において英語を学習することへの抵抗

を示している。また7名が受験科目に英語がない看護学校を受けており、助産師学校についても受験科目に英語がない、或いは英語を勉強しないでよいと予想し入学している。

概して、学生は英語を勉強することへの抵抗を示しているものと捉えた。そして先述したように、専門学校の英語は17名中、11名が役立たないと考えていた。長文読解を和訳するような一般教養の講義は、臨床で実践するに当たり、役立たないイメージをもつのであろう。

更に臨床においては、英語やドイツ語が混在している現実からか、カルテや参考書、英語での表記に関しては「どちらともいえない」と回答した者が半数以上であり、1ヶ国語に統一してほしいと考える「ややそう思う」も含めて学生が12名いた。

これらの結果を踏まえて、本来のシラバスに修正を加えて学生に開示し、7回のプログラムを組んでみた。

講義の展開

学生のニーズをもとに講義予定を組み、カリキュラムは「読めること」「わかること」を目標とし、それも文章が読めなくても、専門用語はわかるということを最終目標にした。そして10月から始まる分娩介助実習において、カルテの用語が英語で書かれていても抵抗なく読めることにした。

どの学生も助産に対する強い目的意識があって入学したことであり、助産に焦点をあてることで英語というよりも、助産分野における用語、疾患名などに興味をもつことがねらいである。学生は全員が助産師を目指すものであり、助産に直接関係のある科目になるほど真剣に取り組む傾向があった。そこで、助産に直結する内容に焦点をあてて講義予定を汲むことにした。

表1

第1回	医学英語事始	病院で見かけるカタカナ用語について
第2回	産科周辺用語	産科で用いられる妊娠、分娩、産褥、新生児に関する用語
第3回	女性の医学に関する用語	思春期、更年期、老年期などにおける医学用語
第4回	女性のライフサイクルに関する用語	グループワーク形式：実習場別のグループ編成でゲームを行う
第5回	症例検討	グループワーク形式でゲームを行う。分娩の症例に英語で書かれたパルトグラムを判読する
第6回	症例検討	グループワーク形式でゲームを行い、英語で書かれたパルトグラムを解説する
第7回	産科の和文英訳	これまでとは逆に、日本語で示す産科用語に匹敵する英語を選択するなど、表現がわかることが目標

これらの講義を実施し、定期テストは、これまでの授業の振り返りが主であり、試験範囲についても

詳細に触れた。そして英和辞典（電子辞書も可）を持ち込み可とした。

文章は一切出題しなかった。

1) 教材

医学用語辞典「飯田恭子、マーシャルスミス 早引き看護カルテ用語辞典」から、カルテで見かける単語で特に産婦人科、小児科領域で使われる医学用語を抜粋。基礎助産学、助産診断技術学などで使われているテキスト、助産学大系や最新産科学などから助産学で使われる医学用語を補足した。実際に助産課程で学ぶ分娩経過図（パルトグラム）など助産師が興味を持ちそうな教材を英訳して、講義を進めていった。

2) 具体例について

A 講義の具体例 その1

第1回、2回では、病院内のことを部門、検査、病院の職員などについて英語で表現したものについて考えさせた。

例えば産科医(obstetrician)、婦人科医(gynecologist)、Blood examination (血液検査) urine sample (検尿) などである。産婦人科についてはOBなどである。

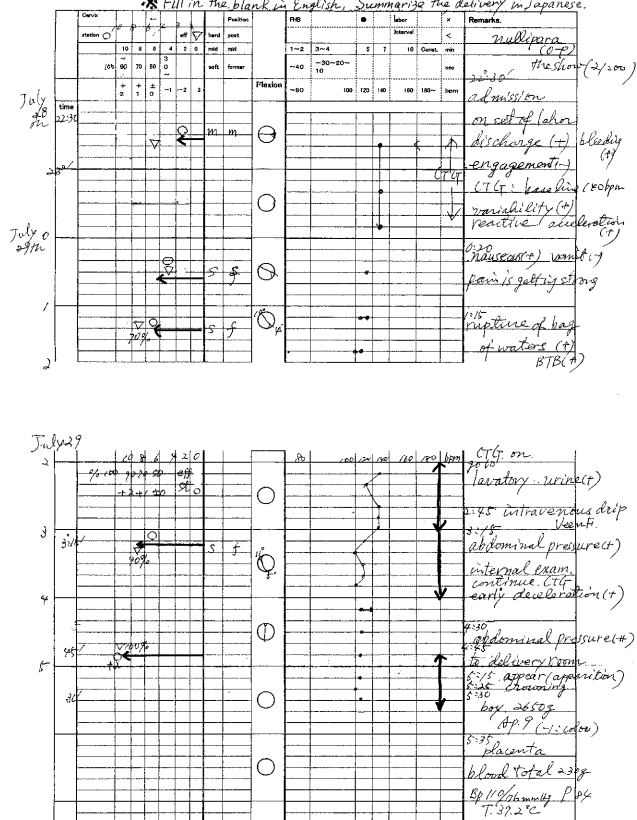
また、病院でみかけるカタカナ用語については、英語ではないものもあり、本来何語かを分類させた。例えばムンテラ (説明)、ブルート (血液)、ヘルツ (心臓) などのドイツ語やアブドーメン (腹部)、カルチ (がん) などの英語やラテン語など。そして病院のそれぞれの部門について、例えばMaternity ward (産科棟)、Neonate (新生児) pregnancy (妊娠) などについて、英語で表記したものを何を示しているのか、考えさせてみた。いずれにせよ、学生には決して英語のスペルを書かせるのではなく、書いてあるものが読めること、その際に発音は拘らず、意味がわかることでよしとした。また日本語で書いてあるものの英語表現については、書かせるのではなく選択肢を与えた。

学生の反応として、病院で実際に見かける、特に産科用語に関しては真剣に授業に取り組み、集中する様子が見られた。

B 講義の具体例 その2

例えば講義がある程度進んだ段階での第5回「症例検討」について説明したい。パルトグラムは図1に示すとおりである。助産学の講義にならい、実習で用いられているビショップスコアに基づくパルトグラムを使用し、分娩の経過を記入していった。陣痛 (the labor pain) が開始したこと、いわゆる陣発 (on set

図1 Partogram Summarize the process of the following delivery
* Fill in the blank in English. Summarize the delivery in Japanese.



英単語で表記するようにした。

略語についても以下のような出題をした。

* 次の下線の部分の意味を日本語で書きなさい。

IUGR (Rはretardationであり, 遅延すること)

IUFD (Dはdeathであり, 死)

C/S (CはCaesarであり, ジュリアスシーザーのこと) 等であり, 全て講義の中で扱ったものばかりである。

従って本来辞書を持ち込まなくても, 講義をきちんと聴いていたほどできるはずである。また従来より用いていたテキスト「メディカルイングリッシュ」は, 日本語で書かれたコラムから出題した。例えば以下のようなコラムを抜粋し, 日本語にあった英語を選択させる方式をとった。

例: ラーメン食べる? : lamentable

上杉謙信: West Kensington

以上のようなコラムを10題程度出題した。

学生に不合格者はいなかった。74~91点の得点がみられた。辞書を持込可としたが, 本来辞書がなくてもできる内容であったため, 来年は検討したい。

結果と考察

1) 講義に対する評価

講義としての評価は, 授業評価などが的確であるが, 学生に英語学習の行動変容をもたらしたかどうかを確認することはできない。学生による授業評価は最終授業の直後に行われるからであり, 1つの方法として臨地実習に向いたとき医学英語が学生に身についたかどうかを評価することができる。本来, 講義を行った結果について事後調査を行う予定だったが, 定期テストをもってある一時期の結果とした。この際, テスト辞書持込を許可したことも, 全員の学生がテストに合格した背景として多少の影響を与えたと言える。

学生は教員の進行中のティーチングを評価するものとしてはおそらく最高の適任者であるといわれており³⁾, 学生の学習効果を丁寧に見極めていくことは不可欠なことである。10月現在の臨地実習の場では, 予想通りに講義で指導した内容が, カルテの中に多く遭遇しているが, 忘れていた学生もおり「そういえば習いました。」といった反応がみられている。これは一部の学生のことであり, 本来のレディネスの問題もあるが, 産科用語をみたとき「どこかでみた」「習った」などと想起でき, そして「どこに書いてあるか」を探し出せること, そして解明できる経緯を

of labor) や, 入院 (admission), 陣痛が強くなったこと (getting strong) そして破水 (rupture bag of water) などの表記をし, 学生が一連の分娩の課程がよめるようにした。

またCTGモニター (胎児心拍陣痛図) の判読に際して講義した内容を盛り込んだ。例えばvariability, accelerationなどである。

また腹圧 (abdominal pressure), 排臨 (appartion) 発露 (crowning) などの産科用語は助産師として知っておいて欲しい用語なので英語化した。

そして新生児 (new born, neonate), 胎盤 (placenta), 出血量 (blood total) などの表記をし, 実際に産科棟で使用されている用語で表現をした。学生には実習場別にグループワークをさせ, 活発な討議がなされた。そしてゲーム形式であり, 早く回答が出されたチームが得点していった。

C テストの具体例

学生には英文を出題しないこと, 英単語を書かせないこと, 辞書 (電子辞書可) 持込可とすることなどの条件を告げ, 出題範囲を決めた。主に産科及びその周辺の用語, 産科における検査や症状と産科の疾患を結びつけるような用語とし, 英語力よりも産科で助産師が知っておくべき内容を重視し, それを

たどればよいと考えた。

今回の7回の講義を受けたことで、学生の学習行動変容が著しく見られたとは考えにくい。そして講義名にある「英語表現」ができることについては尚のことである。今回の7回の講義の最終目標は「読めること」であった。表現は出来なくても、意味がわかることに焦点をおいてきた。助産学に焦点を絞り、学生には「授業科目名にある英語表現ができなければならない」といった脅威を与えないようにした。来年度より、同講義の科目名「助産学英語表現法」を「助産学医学英語」「助産学英単語」などのように改正してもよいのではないだろうか。

2) 学生のレディネスとその結果についての評価

冒頭でも述べたように、英語のニーズは殆どの学生になく、半数以上が当学の受験科目に英語がなかったことで入学希望をしており、しかも入学後に英語を勉強するものだと考えていなかった。それでも、助産師に関係のある内容を英語にすると興味を示した背景を熟慮し、学生のレディネスを見るにあたり、英語以外のレディネスについても丁寧にアセスメントする必要があったと思われる。そしてこのレディネスは1年間で学生の入れ替えがあるため、毎年変わるものと思われる。

渡辺⁴⁾によると、大学受験の弊害の反動として、大学入学後に単位さえとればそれでよしとして、それ以上努力しない学習態度も大学生の英語力の低下の原因であるとしている。そして専攻科の学生もそうであるように、大学であれ専門学校であれ、受験に合格するためのテクニックとしての英語しか学んできていないのではないだろうか。その結果、英語を勉強することは辞書を引くことから始まり、一つの単語を解明するだけでも億劫になってくる。その結果英語嫌いになってくるのが推察できる。当専攻科の学生についても、その半数以上は「意外な英語」との遭遇をしていることになる。意欲がないように見える学生に様々な知識を与えようとしても、学びは伸展せず、押し付けようとするれば「いったい何のために役立つのか」という鋭い質問が飛んでくるが、これは単なる反発ではなく、自分で行う行為を自ら意味づけしようとする態度である⁵⁾からそのことも踏まえて彼らの動機づけと主体的な意欲を引き出すように支援できるようにしなければならない。このことから決して英語を一般教養として押し付けることなく、むしろ専門科目に関連あるものとして位置づけ、専攻科の助産を学ぶ学生が受け入れや

すい印象を与えることが大切と考える。

研究職ともなれば、英語の論文に触れることがあるが自力で読めることを目的にするには、7回の講義では無理がある。助産師課程においてこのような講義を組む以上、外国語を学ぶことを予想だにしていなかった学生が楽しく学習でき、達成感を持てるような内容が良いと考えて、ゲームなどをとりいれてきた。以前この科目を担当していた外部講師も、チームに分けてゲーム形式で講義を進めていたため、学生は英語についてのレディネスがなくても、講義そのものを楽しむことはできたと考える。

また助産学を学ぶ教員たちの間で、英語がどの程度役立ったかをカンファレンスする必要があると考える。年々学生の質の変化が見られる中で、これからの助産に必要な内容であり、今後も学生にとって何らかの糸口となる英学習内容を提供できるかどうか、英語を学ぶ意義について教員間で検討していく必要がある。大学院の受験や学位授与すること、四年制大学に進学することなど、様々な卒後の経緯も考えられるが、学生のレディネスから始まり、卒後のニーズに至るまでを十分に把握し、その学生にとって必要な学習を丁寧に査定することは、少数精鋭だからこそ熟慮すべき点であると考ええる。

引用文献

- 1) 鈴木由美：専攻科学生と外国語について。桐生短期大学紀要，15：131，2004。
- 2) 新田章子，池上直己：新卒看護師の学校教育の評価と将来。病院，61(4)：284，2002。
- 3) Larry Keig, Michael D. Waggoner, 高橋靖直訳：大学教員教育評価ハンドブック。玉川大学出版部(町田)，2003。
- 4) 渡辺利雄：英語を学ぶ大学生と教える教師に。研究社(東京)，2001。
- 5) 京都大学高等教育研究開発推進センター編：大学教育学。培風館(東京)，139，2003。